

使徒の働き1章12-26節 「聖霊が降るまでの備え」

1A 待つ祈り 12-14

2A 新たな使徒職 15-26

1B イスカリオテのユダについての預言 15-20

1C 聖霊によることば 15-17

2C 血の地所 18-19

3C 聖書の根拠 20

2B イエスと共にいた者 21-26

1C 復活の証人 21-22

2C 祈りとくじ 23-26

本文

使徒の働き1章を開いてください。今晚は、12節から見ていきます。私たちは、よみがえられたイエスが四十日間彼らと共におられて、聖霊の約束を与えられた後に天に上られたところまでを見ました。その後、弟子たちにその約束、聖霊が降る時までの出来事を見ていきます。

1A 待つ祈り 12-14

¹²そこで、使徒たちはオリーブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に歩くことが許される道のりのところにあった。

今、使徒たちはオリーブ山にいます。ルカは、福音書の最後で、「24:50 それからイエスは、弟子たちをベタニアの近くまで連れて行き、手を上げて祝福された」と書き記していますが、ベタニアは、オリーブ山の東にある町です。オリーブ山の東側から主は天に上げられました。

そして、そこからエルサレムに帰っています。なぜなら、それは主の命令だったからです。「ルカ 24:49 見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」都にとどまっていなさいと言いつけておられました。使徒の働きでも、「1:4 エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。」とあります。

なぜエルサレムなのか？預言者たちのことばには、シオンから良い知らせが出てくるという約束に満ちています。福音がこの都から出てくることが成就しなければいけません。そして、なぜ、とどまりなさいと、イエスは言いつけなければいけなかったのか？彼らは、ガリラヤ出身の人たちです。そこに戻りたくなるのは、山々でしょう。また、主がよみがえられた直後に、すでにエマオの村

に戻るためにエルサレムを離れた弟子たちもいました。この都で、それで父の約束を待ちます。

そして、エルサレムがオリーブ山から「安息日に歩くことが許される道のりのところにあつた」と、ルカはわざわざ説明を入れています。安息日には、働いてはいけません。それで、ユダヤ人たちの間で、歩く距離が定められています。イエスが、世の終わりの患難について語られた時に、荒らす忌まわしい者が、聖所に入ったら、一目散に逃げるのですが、それが安息日にならないように祈りなさいと言われましたね(マタイ 24:20)。歩く距離が定められているからです。当時、ヨシュア記 3 章 4 節で、人々と契約の箱の間が、二千キュビトの距離を置かないといけないというところから、1 キュビトぐらいの距離が定められていました。確かにオリーブ山からエルサレムは、それだけ短い距離にあります。

さらに、この日が安息日だったことが分かります。主がよみがえられて四十日間、彼らに現れていたことをルカは書いていました(1:3)。よみがえられたのは、過越の祭りから三日目です。初穂の祭りの時です。2 章の五旬節は、過越の祭りから五十日目です。今は、この五旬節の日曜日の八日前の安息日です。

¹³ 彼らは町に入ると、泊まっている屋上の部屋に上がった。この人たちは、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであった。

ここの「屋上の部屋」は、伝承によれば、主が弟子たちと最後の晚餐を取られた屋上の部屋ではないかと言われています。弟子たちが、ユダヤ人たちを恐れて戸を閉じて集まっている時に、主がその真ん中に現れましたが、それもこの部屋ではないか？とも言われています。最後の晚餐の時から、復活、そしてここでの昇天後の祈りがそこで献げられて、そして聖霊が降られたとも言われています。



今、エルサレムに行けば、それが起こった場所が、後に十字軍の建物になったところにあると言われています。けれども、この屋上の部屋は、そこではなくて、神殿の敷地の南に広がる、「王の回廊」と呼ばれるところだったのではないかとされています。なぜなら、ルカが福音書で、「いつも宮にいて神をほめたたえていた。(24:53)」としめくくっており、使徒 2 章でペテロが、集まっているユダヤ人たちに説教をして、それで三千人の男がバプテスマを受けたとあるからです。バプテスマをそれだけ大勢受けられるところは、その神殿の周囲にある、ミクヴァと呼ばれるユダヤ教の浸礼槽がないと、そんな水の確保ができないからです。さらに、ペテロは、ダビデの墓が「今日に

至るまで私たちの間にあります。(2:29)」と言っており、ダビデの墓は、神殿の南にあるダビデの町のところにある先祖の墓に葬られたはずだからです。

そして、使徒たち十一人の名を列挙しています。ルカが福音書を書いた時も列挙していました。その時、最後に、イスカリオテのユダの名も書いています。「6:16 イスカリオテのユダで、このユダが裏切る者となった。」と言っています。

¹⁴ 彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。

ここに、使徒たちの他に数えられている人々がいます。ルカは福音書で、「女たち」について多くを書き記しました。「8:1-3 その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人もお供をした。2 また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、3 ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。」そして、十字架のところにも女たちは遠くから眺めていたし、復活されたイエスの墓のところに来たのも、女たちです。主は、指導的な働きには男を立てることが多いですが、女たちを大いに用いられることがわかります。

そして、驚くべきは、イエスの肉の家族がここにいることです。「イエスの母マリア、およびイエスの兄弟たち」とあります。マリアやイエスの兄弟たちのことを福音書の著者で誰よりも書いているのは、ヨハネです。主が十字架につけられている時に、マリアとヨハネに語りかけられました。「19:26-27 イエスは、母とそばに立っている愛する弟子を見て、母に「女の方、ご覧なさい。あなたの息子です」と言われた。27 それから、その弟子に「ご覧なさい。あなたの母です」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分のところに引き取った。」

主が公の宣教活動を始められる初期は、弟子たちと家族がいっしょに動いていた時があります。カナの婚礼は、マリアが弟子たちとともにイエスを招いていた時に起こったことです。その奇跡の後に、「ヨハネ 2:12 母と弟たち、そして弟子たちとともにカペナウムに行った。」とあります。初めはいっしょに動いていましたが、途中から離れています。主が本格的に宣教の働きを始めてからは、彼らがイエス様を引き取りに来ようと思ったら、「マルコ 3:35 だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」と言われましたね。そして、ヨハネ 7 章には、肉の兄弟たちが、まだ信じていなかったことが書かれています。「7:4-5「自分で公の場に出ることを願いなから、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい。」5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。」

しかし、主が復活されました。そして、自分の兄弟であり、また息子であるイエスが、自分たちの主となったのです。コリント第一 15 章には、ヤコブに主が現れたことが書かれています。そして、新約聖書の手紙には、ヤコブの手紙があり、またユダの手紙もあります。ユダも、主の兄弟です。マリアにとっては、とてつもない出来事だったでしょう。御使いガブリエルに、神の子をみごもることが告げられ、イエスが 12 歳の時に、神殿にいるのに「わたしが父の家にいるのは当然である」と言われました。その時、「母はこれらのことをみな、心に留めておられた。」とあります(ルカ 2:49,51)。こうして、これら心に留めておいたことが、すべて復活において解明されたのです。

私たちにも、肉の中に生きているために、分からないことがどんどん起こりますが、復活の主はそれがなぜ、起こっているかを後になって、明らかにしていけます。

2A 新たな使徒職 15-26

1B イスカリオテのユダについての預言 15-20

1C 聖霊によることば 15-17

¹⁵ そのころ、百二十人ほどの人々が一つになって集まっていたが、ペテロがこれらの兄弟たちの中に立って、こう言った。

彼らが「一つになって」集まっていました。これは物理的に一つになっていただけでなく、一つの共同体として、イエスを主とする共同体として集まっています。120 名ということが象徴的です。12 は統治を示す数字で、イスラエル十二部族、そして十二使徒です。

この中でペテロが、立ち上がって語り始めました。これからペテロが、イエスに従う者たちの指導者として動いていきます。彼は、とんでもない過ちを犯す直前に、このことをイエスに命じられていました。「ルカ 22:31 シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。32 しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい。」主が、彼がご自身を三度、知らないと言った後に、彼が立ち直って、そして兄弟たちをカづけなさいと言われました。そして主が、よみがえられた後、ヨハネ 21 章で、ペテロと他の弟子たちがガリラヤ湖で漁に行き、主は岸边におられて、言われた通り網を降ろしたら大漁でした。そして、イエスから、ペテロは、三度「わたしを愛しますか」と問われ、「わたしの羊を飼いなさい」と命じられました。

ピリポ・カイサリアにおいて、ペテロは主に使命を与えられていました。「16:19 わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」神のご計画の中で、ペテロが天の御国の鍵が与えられているというのです。

1章8節には、エルサレム、ユダヤとサマリア、それから地の果てにまでわたしの証人となるという、主のご計画を見ました。その一つ一つの分岐点において、天の御国の鍵が開かれていくところにペテロがいました。2章において、彼らが聖霊で満たされ、ペテロの説教でユダヤ人が三千人、バプテスマを受けます。エルサレムです。それから、8章でピリポが伝道をして、サマリア人が救われていきますが、そこにペテロとヨハネが遣わされ、手を置くと、サマリア人が聖霊のバプテスマを受けました。そして10章、ローマの百人隊長コルネリウスが、ペテロが語る主のことばを聞いて、そこで異言を語り、神を賛美しているのを見ました。聖霊のバプテスマを受けたのです。それで、そこ場で水のバプテスマも授けました。これは大きかった、神の救いは異邦人にまで及んでいたことが、教会の中で明らかにされていったのです。地の果てです。このようにして、ペテロは誕生したばかりの教会において、指導的役割を果たします。

2C 血の地所 18-19

16「兄弟たち。イエスを捕らえた者たちを手引きしたユダについては、聖霊がダビデの口を通して前もって語った聖書のことばが、成就しなければなりませんでした。

ペテロは、これから、イスカリオテのユダに代わる使徒を補充すべく動いて行きます。そして、それは神のみことばを根拠として動いていることに注目してください。これが、神の国の姿です。

イスカリオテのユダの裏切りと、彼の自殺は、聖書のことばの成就だったということです。ここで、聖書についてとても重要なことをペテロは語っています。一つは、その聖書のことばが「聖霊」によって与えられているということです。これを「靈感」とも言います。神の息が吹き込まれた、神によって語られたということです。ダビデ自身が、自分が主の霊によって語っていることを話しています。「Ⅱサム 23:2 【主】の霊は私を通して語り、そのことばは私の舌の上にある。」主イエスご自身が、ダビデは聖霊によって語ったことを確認しておられます。「マル 12:36 ダビデ自身が、聖霊によって、こう言っています。『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。』』」そしてペテロが、ここで、ダビデが聖霊によって、これから引用する詩篇の言葉を語ったと言っているのです。パウロが「Ⅱテモ 3:16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」と言いました。

そして、「成就しなければなりませんでした」と言っています。これは、神の語られたことは誤っていない、その通りになり、真実であるということです。誤りがないということです。神の靈感によって、聖霊の導きによって聖書の著者は書いているので、誤りから守られているということです。

聖書が、このように神の靈感によるもので、必ず成就するものだという信仰によって、初めて神の国は成り立ちます。そして、この信仰が深く根付いているところで、初めて教会が教会として成り立ちます。神は、ご自分のことばで天地を造られました。そして預言者を立てられ、そのことばによ

って人々を生きるようさせると言われました。いのちも、真理も、教えも、すべて神の口から出ることばによって成り立っているのです。そして聖書は、神のことばなのです。

主イエスご自身が、聖書を神のことばとして捉え、律法と預言者が成就するために来られたのです。山上の説教でもそのことを語られましたし、パリサイ派との論争でも、「あなたがたは、人の教えによって、神のことばをなおがしろにしている」と言われたし、そして、十字架も、よみがえりも、聖書の言葉が成就するためだと言われました。ご自身を捕えようとする者たちが来た時、ペテロが剣を出しましたが、それを下ろしなさい、御使いの十二軍団を呼ぶことができるが、「しかし、このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書が成就するためです。」と言われたのです(マタイ 26:56)。そして、よみがえられてから、弟子たちに、キリストが苦しみをうけて、それから栄光に入ることを説き明かされたのです。

それにも拘らず、教会の中で聖書信仰が蝕まれているのは、まさにサタンのしわざです。聖書が、神のことばではなく、人の書いている部分があるとする人たちがいます。大まかな考えにおいては神のものでありますが、一つ一つのことばは、必ずしも神からのものではないかと言います。まことしやかにいいますが、そうやって神の国ではなく、人の哲学や教え、悪霊からの教えが入ってきて、まるで別物になっていくのです。サタンが初めに攻撃したのは、神のことばに対してでした。「創世 3:1 神は本当に言われたのですか。」とエバに言いましたね。このようにいって、主の言われたことを疑い、それに背くようにそそのかすのです。

¹⁷ ユダは私たちの仲間として数えられていて、その務めを割り当てられていました。¹⁸(このユダは、不義の報酬で地所を手に入れたが、真っ逆さまに落ちて、からだが真っ二つに裂け、はらわたがすべて飛び出してしまった。¹⁹ このことは、エルサレムの全住民に知れ渡り、その地所は彼らの国のことばでアケルダマ、すなわち『血の地所』と呼ばれるようになっていた。)

ユダは、十二使徒の中に数えられていて、金入れを預かっていました(ヨハネ 12:6)。しかし、盗人であり、そこに入ってくるものを盗んでいたのです。そして、彼は主をも、「不正の報酬」でユダヤ人指導者らに売り渡してしまったのです。ユダは、銀貨三十枚を神殿に投げ込みました。このことも、ゼカリヤによって預言されていたことでした。

そして、首をつって死んだとあります(マタイ 27:3-5)。そして、彼らは、血の代価だから神殿の金庫に入れることはできないとして、その金で陶器師の畑を買いました。ここには、ユダが地所を手に入れたように書かれていますが、祭司長たちと長老たちは、ユダの名でその陶器師の畑を購入したので、矛盾していません。

それから、ユダは首をつって死にました。ここでは、「真っ逆さまに落ちて、からだは真っ二つに

裂け、はらわたがすべて飛び出してしまった」とあります。これは、他の誰かが城壁からその死体を投げ落として、ヒノムの谷に落ちて、からだが真っ二つに裂け、はらわたが飛び出した、という説明ができます。主を売り渡したのは、過越の祭りの時ですから、エルサレムに死体があつては儀式的に汚れてしまいます。それで、死体を運び出さないといけないのですが、ヒノムの谷も汚れたところなので、近づくこともできません。それで外から落としたと想像できます。そして、その名がアケルダマとありますが、血の地所です。血を流した者は、血によって報いを受けるのです。ところで、今も、ヒノムの谷にその地所のあるところに跡地があります。

そして、このヒノムの谷が、ゲヘナと呼ばれますが、イスカリオテのユダの定めを暗示していますね。彼は、行くべきところに行ったことをペテロは後で言及します。

3C 聖書の根拠 20

²⁰ 詩篇にはこう書いてあります。『彼の宿営が荒れ果て、そこから住む者が絶えますように。』また、『彼の務めは、ほかの人が取るように。』

初めは69篇から、次は109篇からの引用です。どちらも、「呪いの詩篇」とも呼ばれるものです。詩篇には、人を呪う祈りがあります。ここはとても大切なことで、その呪いが主ご自身に対して向けられているということです。主こそが、呪うことのできる唯一の方だからです。復讐は主がするものであり、ゆえに、自分の怒りや呪いをその人に向けるのではなく、主ご自身に向けて、自分から呪いや復讐は手放すのです。呪いの詩篇では、ダビデが、サウルやアブサロムなど、自分の命を狙っていた者について祈るのですが、実は彼自身のこと以上に、聖霊の導きでキリストご自身が裏切られることを預言していたのです。

ところで、ペテロもパウロも、使徒たちは、聖書のことばをいつも引用していました。教会の人々もそうでした。説教の時もそうですし、祈りの中でもそうです。そして、教会の行くべき方向について、今ここでペテロは、みことばによって動いています。これが、教会の姿です。みことばを語ります。みことばによって祈ります。そして、みことばによって、神の教会を治めます。

2B イエスと共にいた者 21-26

1C 復活の証人 21-22

²¹ ですから、主イエスが私たちと一緒に生活しておられた間、²² すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした人たちの中から、だれか一人が、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。」

十二使徒の資格として、主イエスと一緒に生活したことが挙げられます。十二使徒以外にも、多く弟子たちが、共に生活をしていました。そして、主の公の働きは、ヨハネのバプテスマから始まっ

ています。ヨハネが御国を宣べ伝え、そして主がヨハネからバプテスマを受けられて、聖霊に満たされて御国を宣べ伝え始めました。その時にすでにして、ずっといっしょにて、十字架と復活、天に上げられる日まで一緒にいた人です。ある時にやってきて、ある時にはいなくなった人でもありません。ずっとその間、いた人であります。イエスを証して、その復活を証しするからです。

2C 祈りとくじ 23-26

²³ そこで彼らは、バルサバと呼ばれ、別名をユストというヨセフと、マツティアの二人を立てた。²⁴ そしてこう祈った。「すべての人の心をご存じである主よ。この二人のうち、あなたがお選びになった一人をお示してください。²⁵ ユダが自分の場所へ行くために離れてしまった、この奉仕の場、使徒職に就くためです。」²⁶ そして、二人のためにくじを引くと、くじはマツティアに当たったので、彼が十一人の使徒たちの仲間に加えられた。

弟子たちの中で、二人がいました。これではどちらであるか分かりません。それで、主の選びを求めするために、彼らは祈りました。ところで、ユダが「自分の場所へ行くために離れてしまった」と言っていますが、これは先ほど言いましたように地獄のことです。主がすでに祈りの中で、語っておられました。「ヨハ 17:12 彼らとともにいたとき、わたしはあなたが下さったあなたの御名によって、彼らを守りました。わたしが彼らを保ったので、彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためでした。」

そして、祈った後にくじを引いています。これは、旧約時代、主のみこころを求めるのに使われた方法です。大祭司が宥めの日に、二匹のやぎをアザゼルのために選ぶ時に、くじを引いていますし(16:8)、ヨシュアは相続の割り当て地を決めるのに、くじを引いています(14:2)。箴言 16章 33節には、「くじは膝に投げられるが、そのすべての決定は【主】から来る。」とあります。そのくじをも、主が導いておられ、主が決定しておられるということです。ところが興味深いことに、これ以降、くじ引きによって、みこころを求めることはなくなりました。その代わりに、聖霊によって、具体的には預言によって選ばれていました。13章にて、アンティオキアの教会で、パウロとバルナバが、宣教の働きのために選り分けられますが、聖霊が語られたことが書いてあります。それは預言によって与えられたであろうものです。

そして最後に、マツティアが選ばれましたが、これはペテロが聖霊の満たしの前に行ったことで、彼は異なる。パウロがユダに取って替わった神の選びだとする意見があります。私は違うと思います。十二使徒の条件は、バプテスマのヨハネの時から共にいて、生活をしてきたというものです。パウロは復活のイエス様には会っていますが、共にはいませんでした。けれども、特別な、異邦人のための使徒であることは確かです。

ここで大事ななのは、ペテロが主のみこころを求めたということ。皆で心を一つにして祈ったという

こと。これが教会の姿です。まず、聖書は神からのものであり、そこに書かれていることによって行動を決めていきます。そして、みなで祈って、みこころを求めます。その中で、一つ一つ教会のことがらが進んでいきます。そして、このような営みがあるからこそ、聖霊が注がれる時に、教会が力を持つのです。教会は、聖霊の力と、そしてみことば、祈りがあって前に進むのです。